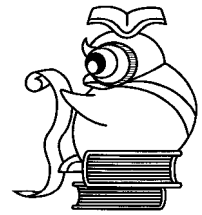


ぱびるす

聖学院大学総合図書館報

第62号 (2016年春)

祝卒業・
新生歓迎号



図書館体験



吉田 博司

我々研究者にとって、図書館は命である。ことに歴史の古い時期の文献は、書店や古書店では手に入らないものが多い。そのため歴史のある大学図書館を渉猟することになる。

私は明治・大正期の日本政治史が研究対象で、当時の雑誌などは慶応義塾図書館の地下にもぐり、ホコリにまみれた『太陽』や『中央公論』などをめくったものである。19世紀ドイツの国法学の原典にあたる必要があったときも、同図書館で保存されており、助かったおぼえがある。タイムスリップしたようにも感じた。

慶応の他にもよく利用したのが国立国会図書館である。上野の分館にも行った。開架ではないので待ち時間が長かったが、文献は豊富であった。

その他、東京大学、国学院大学、同志社大学などの図書館に御世話になった。市立図書館では、加賀市立図書館で思わぬ資料を見つけた。金沢大学附属図書館のついでに行ったのだが、館長が郷土史研究家で、親切に紹介してくださったのである。

海外の図書館では、オックスフォード大学の思い出がある。特別な研究資料があったわけではないが、戦後高まった日本研究の現状を把握しておきたかった。セント・アントニーズ・カレッジの一角に、日産の支援で設置されたモダンな日本研究機関があり、そこの地下開架にもぐって調査した。帰りに、ブドウの木があるパブで食事をした。

今、図書館はコンピューターのおかげで検索も楽になり、資料提供サービスも向上した。しかし、足を使って図書館巡りをするのも大切に思う。思わぬ出会いと発見があるかもしれないからだ。

美しい図書館との出会いもその一つだ。慶應義塾は赤レンガの旧図書館が印象的である。イギリ

スのケムブリッジ大学は、ケム川のほとりに客船のような佇まいで人をひきつけている。また、オックスフォードのラドクリフ・カメラは古代ギリシャの神殿のような雰囲気とその伝統を感じさせる。アバディーン大学はスコットランドであるが、花崗岩の白壁が陽光に映え、輝いている。

やはり古い歴史のある図書館は美しい。

(総合図書館長 政治経済学部政治経済学科教授)



おすすめ本紹介

『暴力の人類史』(上・下)

スティーブン・ピンカー 著

幾島幸子, 塩原通緒 訳

青土社 2015.2

この書は、人類史における暴力の態様と増減について、殺人・宗教・イデオロギー戦争等の実証、分析を通して解明した大作である。これにより筆者は人類の希望を示唆する。

